赤い数字

ムネソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤い数字

【Ｎコード】
Ｎ０１５９Ｑ

【作者名】
ムネソラ

【あらすじ】
「目が覚めたとき、目の前には時限爆弾が置いてあった。」冒頭からあり得ない状況下に置かれた、ある男の話。

目が覚めたとき、目の前には時限爆弾が置いてあった。
その時限爆弾はドラム缶らしき台の上に置いてあって、暗闇の中で赤い数字が一秒ごと、数を減らしていた。
何…だこれは、……なっ！？
俺はその時限爆弾に近づこうとした、だがそれはできなかった。みぞおちの辺りで締め付けられるような圧迫感を感じる。これは疑う余地も無い、俺は縛られていた。ロープかなにかだろう。手は後ろで縛られ、その上で背中にある冷たい柱か何かに胴体を縛り付けられていた。
俺はあたりを見渡した。だが、あたりは闇一色で見えるものは目の前の赤い数字……。その光でほのかに周囲は照らされているが、そこには俺と時限爆弾があるだけだった。
「おいっ！　だれか、いないのか！」
俺は思わず叫んだ、そもそもこれは何だ？　何の冗談なんだ。
だがその声は、暗闇に虚しく響くだけだった。
なんだ……、ここは何処だ？　誰も…いないのか？
俺はなんとかロープを外せないか試みる。誰の仕業か知らないが、俺はこんなことに付き合ってはいられない。
「う、うぐぅ……、くそっ！」
かなりしっかりとロープは縛られている。動けば動くほどロープが体に食い込み、ギリギリと締め付けられる。
「あ～くそっ！　なんなんだいったい……」
俺はひとまず背中にある柱にもたれる。じっとりと汗が吹き出ていた。軽く上がった息を整えながら俺の目は前を見る。２３：１４…１３…１２……。俺の前でその時限爆弾はいとも平然と表示を変化させ続けていた。
あと２３分。……２３分？

何が、２３分なんだ……？
もしかしてこれは相当ヤバいことなのかもしれない。そう思った瞬間、体中の毛穴が開いたような気さえした。
２３分って、２３分だよな……。どういうこと…だ。あれは明らかに時限爆弾で……残り２３分？　――なっ…何が時限爆弾だ！　冗談だろ？　いい加減にしてくれ！　何なんだ２３分って……。あぁっ、２２に表示が変わりやがった！　２２分後に何が起こるっていうんだ？　本当に爆発なんてする訳じゃないよな！？　マジか！
何なんだよっ！
「おい！　誰かいないのか！　ふざけんな！　誰かこれをほどけ！」
俺は激しく体を動かした。このロープを何としてでも外さなくては。
さらにロープが体の皮膚を擦り、締め付けていくが、そんなことにかまってはいられなかった。これをほどかなければ待っているのは死。
そんなことになってたまるか！
だが、いくら揺すってもいくら体をうねらせても、ただただロープが体を痛めつけるだけで、緩む気配もない。
「くそぉ……　」

そしてどれくらいそんなことをやっただろう……あぁ、表示が０７：３７…３６…３５……と流れている、１５分以上もやっていたらしい……。
縛られていた腕の部分の服はやぶれ、後ろ手に縛られていた手首は、たぶん血だろう、熱い液体で手がぐちゃぐちゃに濡れていた……。
いっこうにロープは緩まなかった。ボロボロになり汗だくになって、俺自身が息を切らしていること以外、状況は全く変わっていない。
いや……俺の残りの命があと7分程度に縮まっていたか……。

そもそも、そこにあるのは本当に本物の時限爆弾なのだろうか？
よく考えれば、こんな日本に時限爆弾なんてそうそうあるものじゃない。例えばこれはすべてたちの悪い冗談で、あれは本物の時限爆弾ではないのかもしれない。
そうだ！　きっとそんなところだろう！　こんな状況が本当にある訳が無い。
目覚めたら目の前に時限爆弾が置いてありました？　あり得ない。
何だくそっ……。冗談なのか。「へへ…、だまされた。俺の完敗だ。怒っちゃいないよ。怒っちゃいないから、……早くこの縄をほどいてくれないか？　ドッキリなんだろ、もう気づいたから。いいだろもう。いいから早く……俺をほどいてくれ！　なあ、いるんだろっ！　なあっ！！　早くほどいて！！　もう終わりにしてくれよ……」お願いだから……
でも暗闇は、何も答えてはくれない。

この真っ暗な空間は、ただひっそりと俺を笑っていた。「キミは死ぬんだよ。キミはここで死ぬんだ」ご丁寧にそんなことも暗闇は俺に教える。
あれは本物だ。本物の時限爆弾で、時間が来ればあれはこの空間もろとも俺を吹き飛ばす。
耳を塞ぎたいけど、俺の手は後ろで縛られていた。
俺はここで死ぬのか？　ああ、死ぬようだった。
時限爆弾は律儀に数を減らしている。
０１：４７…４６…４５……。２分を切った。
俺はあと２分も経たないうちに死ぬらしい。しかもそれはどうやら免れないことだ。
自分に何が起こったのか未だに分からない。暗闇もそれは教えてくれなかった。ただ分かっているのは、数字が０１：３０を通過し、残りはもうそれだけだと言うことだった。

空が晴れていた。突き抜けるような真夏の青だった。山の向こうは入道雲ができていた。海の潮風が気持ち良かった。とんだ洗濯日和だと思った。煌煌と照った真夏の太陽で干した洗濯物は非常に気持ちいい。

海岸線で俺は自転車を走らせていた。行きよい良くまわる車輪。海を見れば海面がきらきらと輝き、海水浴を楽しむ若者たちが元気に騒いでいた。

幸せな景色、待っているのは妻と幸せな家庭。俺は思い切り自転車のペダルを踏み込む。幸せな生活が俺を待っていた。

でも目の前には赤く光る数字があった。気がついたらその数字だけが目の前を覆っていた。

その数字は一つ一つ数を減らしていた。どうやら数字の残りは後もう少しのようだった。

００：０５…０４…０３…０２…０１……

いったい０になったら、何が起こるというのだろうか。

（後書き）

ん～、極限状態ってヤツをうまく表現できていたでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0159q/

赤い数字

2011年1月7日19時10分発行